

台風 1330 号(ハイエン)の調査報告をマニラで実施しました(2014/8/20-22)

テーマ：2013 年フィリピン台風ハイエン
場所：フィリピン・マニラ

2013 年 11 月 6 日～9 日にかけてフィリピンを横断した猛烈な台風、台風 1330 号(ハイエン)は、フィリピン各地に甚大な被害をもたらしました。本災害を受け、東北大学災害科学国際研究所では 2013 年 12 月から 2014 年 3 月まで計 6 次にわたる調査団、合計 21 名の教員をフィリピンに派遣し学際的な調査を実施しました。

2013 年度の調査より得られた成果をフィリピンの政府機関や大学等に報告するため、8 月 20 日から 22 日かけて当研究所のサッパシー アナワット准教授(寄附研究部門)、イ ケリーン チョンヨン助教(地域・都市再生研究部門)、呉修一助教(災害リスク研究部門)とリーラワット ナット氏(東京工業大学博士課程後期)がマニラを訪問しました。訪問先は、フィリピン気象庁(PAGASA)、フィリピン国家防災管理局(NDRRMC)、フィリピン大学 Diliman 校、Baguio 校、フィリピン災害軽減管理プロジェクト(National Operational Assessment of Hazards[NOAH])、PANA HON TV、JICA、国際交流基金マニラ(The Japan Foundation, Manila)で、合計 8 機関の方々に我々の成果を報告しました。

PAGASA では、我々の 2013 年度調査結果を報告するとともに、PAGASA の台風予警報システムに関して多くの討議を行いました。また、PAGASA と JICA で新たに発足したプロジェクト『Enhancing Capacity on Weather Observation, Forecasting and Warning』では、日本の気象庁からの協力を受け、PAGASA の警報を如何に地元行政、住民にわかりやすく伝えるかに取り組んでいます。当研究所の調査結果を本プロジェクト担当者(JICA と日本の気象庁)に丁寧に説明する事ができ、明らかとなった台風ハイエン時の避難警報の問題点等を報告することが出来ました。当研究所の調査結果が今後のフィリピンの台風予警報システムの改良に貢献する事が大いに期待されます。

合同調査を実施したフィリピン大学 Diliman 校の Espina 教授とタクロバンの病院被害の調査報告書の作成過程に関して討議するとともに、Espina 教授が新たに開発した強風に耐えうるトタン屋根の接合方法などに関して意見交換を行いました。また、NOAH プロジェクトでタクロバンの高潮計算を実施中の Mr. Carl Vincent 氏と、今後の地形データ、浸水高・範囲データの共有や共同研究の実施に向けた協議を行うことが出来ました。その他にも、UP Diliman 校の Zayas 教授とタクロバンの地質的特性や防災教育について、UP Baguio 校の Ciencia 教授と 2015 年 1 月の国際会議の開催に向けた打ち合わせ等、非常に多岐にわたる機関、方々に我々の調査結果を報告するとともに、今後どのように減災に向けた取り組みが必要かを大いに議論することが出来ました。

災害科学国際研究所では今後も、この大災害からのフィリピンの復興や今後の防災に少しでも貢献できるよう、全力で頑張っていく所存であります。

(次頁へつづく)



PAGASA の予警報システムの説明を受ける様子



PAGASA で調査報告書を渡すサッパシー准教授



UP Dilman 校の Espina 教授との打ち合わせ



強風に耐えうるトタン屋根の新しい接合方法



UP Baguio 校の Ciencia 教授との打ち合わせ



国際交流基金マニラにて

文責：呉 修一（災害リスク研究部門）
 アナワット サッパシー（寄附研究部門）